

巻頭言

教父の思考様式をめぐって

K・リーゼンフォーバー

教父学は、教義史のための資料集成あるいは中世哲学への序論という性格を越えて、現代においては独立した研究領域を構成しようようになった。この進展は、古代後期におけるキリスト教思想としての、教父時代の時代的な一体性に基づくだけでなく、さらに深い意味で、教父たちの思索における構造的・内容的な一体性によって根拠づけられる。たしかに教父の思想は、個々の著者の民族的また個人的な性格によってだけではなく、時代や教義上の立場によって、相対立するほどの豊かな多様性を示している。しかしこの緊張は、ある意味で共通の考え方、相互に結びついた現実把握によって包括されている。この現実把握は、古典古代の伝統に対しても、中世のスコラ学に対しても、特徴的なものとして際立っており、教父研究のもつ比類なき魅力をなしている。

厳密な学問の理想や推論的立証の要請、専門分野の特殊化などによってはまだ拘束されていないがゆえに、教父たちの思考は、啓示と理性認識の根源的相関性、さらには信仰と思弁、神学と哲学、教義と観想の一致に対する確信に支えられている。そのなかで神学的には、聖書釈義と聖伝・教会の教えの一致が固く守られるばかりでなく、より広い領域

では、(啓示の)歴史と知的理解、信仰と現実体験、理論と生、そこから教義と司牧の一致が要請される。このような種々の次元は、聖書の持つ多層的な意味を説く教説が示しているように、その共通の根を、神の言葉との関連において具体的な形で有している。神の言葉は生きるための指針であり、救いの言葉であると同時に、創造的行為でもあるからである。その際、聖書の言葉が唯一なる真理の最終妥当的で完全な知らせであると理解されることによって、真理そのものの包括的な意味空間が、人間の理解に対して開かれる。この唯一の真理には、すべての人間が様々な程度と形において、認識と生を通してすでに本性的に関与しているのである。

さてこの真理は、ロゴスの啓示のうちに留められることによって、人間の有限な合理性による制限から守られている。すなわち真理は、一方でグノーシス主義的な単なる自己認識への解消に対しては、ナザレのイエスにおける自らの顕現の歴史的現実性によって保証される。他方、真理を歴史的事実性に限定しようとする傾向に対しては、イエスのうちに明らかになった超越の神秘を通して、汲み尽くすことのできない霊的意味へと打ち開かれる。こうして、階層をなしつつ動的に上昇する真理理解という考えは、まずその根源と核心を、神的なロゴスとしてのあるいは真理の現存としてのイエスのうちに見出し、ここから霊に導かれる観想的登攀のうちに、肯定、否定、そして沈黙のうちに行われる超越への参与を通して、神の神秘に向けて展開されてゆくが、同時に、人間存在を神的原型の似像へと造り変えるべく、理性的・倫理的に下降してゆくのである。このようにロゴスは原型的な真理として、人間に対し、その本質的な使命、すなわちイエスのうちに人となった神の真理に同化することを教えると同時に、絶対的な根源的現実の自己言明として、神の秘密を解明し、その中へと導いてゆく。こうしてロゴス・キリスト論は、教父の思想において、現実体験また思考様式の一体性を根拠づけるとともに、真理の認識と神理解、受肉と神化、人間の似像性と自己超越といった最も中心的なテーマに対する鍵を提供してくれるのである。

このような存在論的・神学的な真理概念の持つ力は、神論のうちに確認される。つまりまず、神的精神の根源的自己遂行として神に内在し、かつ世界的な自己言明として歴史を形成する三位一体の思想において確認されるのである。

さらにこの真理解の力は、ギリシア的思惟と聖書の経験の共鳴を通して、離在しかつ近くに現存する神の一なる本質をとらえる試みを可能にする。すなわち真理自体が、存在そのものの顕現に他ならない限り、「わたしは在りて在る」(出エジプト三・一四)という、歴史を動かす自己言明は、存在そのものの不変的自己同一性をめぐるギリシア的な洞察と合致する。また、人間がただその方だけを全身全霊を込めて愛することができる主の唯一性は(申命記六・四一五)、あらゆる多様性を根源的一者に向けて還元する新プラトン主義的思弁によって明らかにされる。そして、善を第一かつ最上の原理とするプラトンの考察は、ただその方のみが「善い」と呼ばれるに値する神(マルコ一〇・一八)の、イエスによって証しされた愛への信仰において完成する。

このような包括的な総合において、教父は、人間の思考力が、精神を照らす根源的一者の光につちかわれたものであり、それゆえにこそ、その超越的な純粹さにおいて賛美しうるのみで言表しえないこの神秘に向かつて、自らを絶えず越えてゆく、ということを知っていた。そのため彼らは、自らの思考にとって主導的な神学的・存在論的地平のなかで、人間の理性能力が真理に与っていること、そして同時に、有限な思考と言語が自己否定と隠喩を通してのみ根源的な真理を語りうることを自覚した。そしてアウグスティヌスは、真理に対する理解を一人ひとりの自己認識に結びつけたのであるが、これは、その個人の心への関わりにおいて、真理でありまたその教師である方の、受肉者としての呼びかけがその使命を完うするようになったと言えるだろう。だがそれは、人間の主観性をこのような形で発見することによって、それと付随して真理を存在論的客観性の次元から解き放つことになった。つまり、教父たちの理解地平を凌駕して、神を愛する心の内面性のうちに真理を生じさせることにもなったのである。